

2020 年 10 月 4 日（日）「富に伴うリスク」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 5:9-11

《新改訳 2017》伝道者の書 5:10-12

- |                                                           |                                                  |
|-----------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| 9 銀を愛する者は銀に満足することがなく、財産を愛する者は利益に満足しない。これもまた空である。          | 10 金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。これもまた空しい。    |
| 10 富が増せば、それを食らう者たちも多くなる。持ち主は眺めるほかにどのような得があるのか。            | 11 財産が増えると、寄食者も増える。持ち主にとって何の成功だろう。それを目で眺めているだけだ。 |
| 11 たらふく食べても、少ししか食べなくても、働く者の眠りは快い。富める者は食べ飽きていようと、安らかに眠れない。 | 12 働く者は少し食べても多く食べても、心地よく眠る。富む者は満腹しても、安眠を妨げられる。   |

【序論】

作曲家の小宮路<sup>さとし</sup>敏さんのことを覚えていらっしゃる方は少なくないでしょう。「歩いてゆこう」「もしもコックさんだったなら」「毛虫が三匹」など数々の名曲を遺した作曲家で、2018 年 11 月 14 日に天に召されました。姉妹教会である多摩ニュータウンキリスト教会の元会員で、生前は玉川学園の小学部教諭、玉川大学の通信教育課程で音楽を担当しておられました。当教会にもハンドベルを献品してくださり、牧心塾ハンドベルリンガーズによる演奏会および教育講演会を開催したこともあります。小宮路兄は生前、20 年以上毎日欠かさず「備忘録」を書き続けておられたそうで、現在は娘さんがメルマガとして毎週土曜日に配信してくださっています（多摩ニュータウンキリスト教会のホームページでも閲覧可能です）。その備忘録の一つに、「お金」にまつわる興味深い記事がありましたので、紹介させていただきます。

■魂を奪うもの

■投稿者：敏・記

■投稿日：2008 年 10 月 24 日（金）02 時 54 分 10 秒

聖書に『金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は、「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた』という個所がある。（ヘブル書 13:5）

かつて日本人は世界の人々から、「経済アニマル」と名づけられるほど、金銭亡者が多かった。今でも保険金詐偽など、自分の夫や妻を殺してでも金を手に入れようとする金を愛する異常な心理を持つ人がいたりする。

冷静に考えるならば、どれほどの財産も、死んで持って行けるわけでもないし、札束で天国の扉が開くわけではない。「何かが無いと困る」と考えるよりも、「何が無くても間に合う」と考えるほうが、よっぽど気がラクになる。あるたとえ話を紹介しよう。

三人の姉妹が、丘の上に建った家で暮らしていた。三人とも心の優しい、神さまを信じる人達で、困っている家族がいると、持っているものを惜しみなく分け与えた。ある日、裏の畑で土を掘り返していると、大きな箱が出て来た。開けてみると、金貨がぎっしり詰まっていた。三人はびっくりして悲鳴を上げた。「魂を奪うものだ！ どうしたらいいだろう？ もう一度、畑に埋めてしまおうか？ それとも私たちがこの家を出ることにしようか？」

隣りの家に引っ越して来た四人の男がこれを聞きつけた。四人は三人の姉妹にどういうことかと尋ねた。「魂を奪うものの手を逃れるにはどうしたらいいか、相談していたんですよ。」「魂を奪うもの？ 何ですか、いったいそれは？」と四人のうちの一人が聞いた。三人の姉妹は裏の畑の端に立って、金貨の箱をこわごわ指さした。「あれですよ！」四人の男は笑い出した。「信じられるかい？」と一番大柄な男が言った。「金貨が魂を奪うってさ！」あごひげを生やした男が言った。「これがそんなに恐ろしいなら、二、三時間、隣りの町にお出かけしなさい。お留守の間に私たちが始末してあげますよ。」

三人の姉妹はさっそく家をあとにした。四人の男たちは相談の末、金貨を等分に分けようと決めた。二人が店に行ってお金を買ってくるようになった。残った二人がその間に箱を掘り上げるという手はずだった。残った二人の男たちは、金貨を四人で分けるより、二人で分けるほうが分け前が多くなると思いついた。「あいつらが帰ってくるところを待ち伏せして殺してしまおうじゃないか。死骸は箱が埋まった穴に埋めりゃいい。」食べ物を買いき出した二人も、金貨を二人で分ける計画を立てていた。「この食べ物に毒をまぜよう。あの二人が死んだら、死骸は箱が埋まった穴に埋めりゃいい。」

二人は家に戻る途中で、待っていた二人に襲われて命を落とした。仲間を殺した二人は死骸を埋める前に腹ごしらえをしようと、死んだ仲間が買って来た食べ物を食べることにした。食べ始めて間もなく毒がまわり、二人は苦しんだ末に死んでしまった。

三人の姉妹は、金貨の箱の脇に四人の死骸を見出した。「わたしたちはこの箱は魂を奪うものだ」と警告した。でもこの人たちは信じようとしなかった。魂を奪うものから一刻も早く遠ざかろうと、三人の姉妹はふたたび家をあとにしたのだった。

ジョークを交えたたとえ話でありながら、お金によって人生が破綻する人間の姿を見事に描いています。お金は人間の生活に不可欠なものでありながら、同時に身を滅ぼさせる危険性を持つ「諸刃の剣」です。本書の中にも「富」にまつわる警告が繰り返し出てくるだけに、コヘレトの問題意識の強さが感じられるでしょう。

## 【本論】

### 本論 1. 富は欲望を満足させない

**銀を愛する者は銀に満足することがなく、財産を愛する者は利益に満足しない。これもまた空である。(5:9)**

「銀」という言葉はもちろん「富」を意味します。その他の翻訳では「金銭」と訳されているものが多いですが、聖書協会共同訳は原文通りに「銀」(qṣṣ/ケセフ)と訳しています。ここで言われていることは至ってシンプルです。お金というものは、どんなに多く持っていたとしても、常にもっと多く手に入るのではないかという可能性を探し求めさせるものです。お金を得ること自体が人生の目標になってしまいますと、どういうことが起こるか。そこには底なしの願望と追求とが待ち受けているでしょう。人は見えない目標に向かって歩き続ける。その結果、「金を追い求めた俺の人生とは何だったのか？」という疑問符でもって締めくくられてしまうのです。コヘレトはこの箇所に入ったばかりのところで、早々に「これもまた空である」という結論を置いてしまいます。

しかし、念のため聖書全体が「お金」をどう見ているかを確認しておきましょう。聖書がお金や富を頭から否定しているかということ、必ずしもそうではないのです。むしろ、旧約聖書の多くの箇所で、神の祝福が財産が増し加えられることと結びついて描かれていることが分かります。

**主は主人を大層祝福され、羊と牛、銀と金、男女の奴隷、らくだとろばを恵まれ、主人は豊かになりました。(創世記 24:35)**

これはアブラハムが息子イサクの結婚相手を見つけさせるため、しもべを送り出したときに、しもべガリベカの家族に対して伝えた言葉です。アブラハムに続く族長たちは皆繁栄し、イサクもヤコブも多くのもので与えられました。

では、富を得ることの何が問題なのか。コヘレトが問題視しているのは、富を得ることそのものが目的となることです。富がいつしか自分の中で神格化(仕える対象と)されてしまう。それほどお金というものは人間にとって偶像になりやすいのです。

## 本論 2. 富は寄食者を引き寄せる

**富が増せば、それを食らう者たちも多くなる。持ち主は眺めるほかにどのような得があるのか。(5:10)**

ここでコヘレトは、富を持つ人に伴う「責任」について語っています。多くの財産を持つということは、それを管理し有効活用する責任が伴ってくる。つまり、それは必要あるところに用いられていくべきなのです。「それを食らう者たち」(寄食者)という言葉も皮肉に満ちていますが、お金に困っている人がお金を持っている人のところに寄っていくのは一面当然のことなのかもしれません。仕事、住む場所、食事を与えてくれる人が必要だからです。

同時に、コヘレトは金銭目当てに構築された人間関係の脆さもよく知っています。「金の切れ目が縁の切れ目」と言われるように、養ってもらえる可能性がなくなったら手の平を返したように離れていってしまうというケースが世の中には多く存在する。そのとき、本当に愛と尊敬と信頼とをもって自分につながってくれていたのかどうかは明らかになります。

本節後半で「持ち主は眺めるほかにどのような得があるのか」と言われていますが、大小異なれど「収入を得る」喜びというものは、そういうチャンスにあまり恵まれていない者にとっては特に大きく感じられるものです。財産の「持ち主」は給与として与え、それを受け取る者が喜んでいる姿を見る。自分以上に喜んでいるのを羨ましく感じるかもしれません。

ここで少し立ち止まって考えてみたいことがあります。それは、財産を持っている人がその一部を誰かに与えるときに感じる感覚、抱く思いです。自分が人々を養っているという喜びに溢れるか、それとも金を吸い取られているという不満が心を占めるか。そこには、その財産を「自分のもの」と捉えているか、「(神からの) 預かりもの」と捉えているかの違いがあるでしょう。

私は中学生の頃、スポーツのクラブチームの先輩に練習の帰りによくジュースを奢ってもらいました。こちらが奢ってくださいと頼んでいるわけではないのですが、買ってくださいるのです。当時はどうして奢ってくれるのか、理由が分かりませんでした。むしろ申し訳なくさえ思えた。しかし、大人になって分かるようになったことは、自分が収入を得るようになると、昔先輩が自分にしてくれたように、今度は自分が誰かにしてあげたいという思いになるということです。その先輩に対して直接お返しをしているわけではありませんが、別の人に同じことをすることで「与える」というサイクルが続いていくのだと。

### 本論 3. 富は眠りを妨げる

たらふく食べても、少ししか食べなくても、働く者の眠りは快い。富める者は食べ飽きていようと、安らかに眠れない。(5:11)

ここにはもう一つの皮肉があります。財産を多く持つ人よりも、その日暮らしの労働者の方が心地よい眠りを得られるというのです。労働者は日中の過酷な仕事で肉体的に疲れ切っているので、空腹であっても満腹であってもぐっすり眠ることができる。また、この「眠り」には「失うものがない」という安心感が伴っているとコヘレトは言います。

一方、富む者は多くあるお金にまつわる不安で安眠ができないと言われます。財産が何かのことで失われるのではないか、雇用をどうしていくか、余分な税金を取られないためにはどうすればよいか……など、色々なことに頭を悩ませ、眠りが妨げられる。ある国で大事件が起きたことによって、自分の資産に莫大な損失が生じる可能性がある。だから、常に世界中のお金の動きに神経を尖らせていなくてはならない。眠りの質が悪いと体調を崩す要因となる。このように、多くの財産を持つということは、それを失うリスクを併せ持つので、そのことの恐れが伴うのです。その意味で、最初から多くを持っていない人にとっては、そのような不安は少ないと言えるでしょう。

いずれにせよ、神は各々の賜物に応じて必要な分をお与えになります。私たちはそれをどう管理するかという責任ある人生を歩んでいるのです。多く与えられた者にはそれなりの心労が伴い、それをどう用いたかが問われる日が来る。一番良いのは、人生で必要な分が過不足なく与えられることですが、人は常にそれ以上のものを求める傾向にあるのです。

#### 【結論】

富は多く持つほど管理が難しくなるものです。しかし、生きていくために不可欠なものでもあり、どこまで求めるかの見極めが重要なものと言えます。何のためにどれくらい必要なのかを知り、その分を神様に具体的に祈り求めることが大切でしょう。得られたら得られただけよいという無制限の考え方は、富を偶像とする危険性と隣り合わせです。そして、コヘレトが言うように、その結末は「空しいもの」となるでしょう。富に人生を支配されることなく、自分が地上で果たすべき使命に集中し、そのために必要な分を神に求めていきたいと思います。

### 【祈り】

天上で無限の富を蓄えておられる神よ。あなたは、地上に生きる者たちにとって何が必要であるかをご存知です。使命と責任を与え、そのための資金を求めさせ、お与えください。私たちが地上で果たしていくべき使命が何であることを教えてください、正しい目的に基づいているのであれば、豊かに満たしてくださるようお願いいたします。富そのものを目的とすることなく、常に神の御心を行なっていくための手段として賢明に用いていくことができますように。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
人間を経済的生き物として造り、ご自身の富を管理させ給う、父なる神の愛、  
神の国の前進のため、必要あるところに御手を差し伸べ給う、主イエス・キリストの恵み、  
富を偶像とする誘惑から守り、常に神が与えてくださる使命に目を向けさせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。